ココから元気の出る歌集

冬の歌　愛唱歌　あなたにエール!!

城直美　編

高島平ココからステーション　監修

2021 年 1 月

冬景色

作者不詳　大正二年

1　さ霧消ゆる　湊(みなと)江の
　舟に白し　朝の霜(しも)
　ただ水鳥(みずとり)の　声はして
　いまだ覚(さ)めず　岸の家

2　からす啼(な)きて　木に高く
　人は畑(はた)に　麦を踏む
　げに小春日(こはるび)の　のどけしや
　かえり咲きの　花も見ゆ

3　嵐吹きて　雲は落ち
　時雨(しぐれ)降りて　日は暮れぬ
　若し(も)灯(ともしび)の　濡(ぬ)れ来(こ)ずば
　それと分かじ　野辺の里

✦冬景色

文部省唱歌。歌詞の季節は冬の始めの頃。一番は水辺の朝、二番は田園の昼、三番は里の夕方が描かれています。さ霧は霧のこと。さは、語調を整えるための接頭語で「さ霧消ゆる」で秋の終わりを表しています。

雪

作者不詳　明治四十四年

1　雪やこんこ　あられやこんこ
　降っては　降っては
　ずんずん　積もる
　山も野原も　綿帽子(わたぼうし)かぶり
　枯れ木残らず　花が咲く

2　雪やこんこ　あられやこんこ
　降っても　降っても
　まだ降りやまぬ
　犬は喜び　庭駆(か)けまわり
　猫は火燵(こたつ)で　丸くなる

✦雪

文部省唱歌。誰もが知っている雪の歌の定番ですが、「こんこ」をこんこんと歌ったり、一番と二番がごちゃ混ぜになってしまったり。それでも気持ちが童心に帰る、うきうきする一曲です。大雪になるのが早かった今年、雪深い地域で暮らす方々にとっては、歌詞にあるような雪景色の美しさや楽しさよりも、雪かきしてもしても・・と言うのが現実でしょう。「こんこ」は来い＝降れ、つまり、雪よもっと降れ降れという子供が喜び、はやしている言葉と言われています。

雪山讃歌

昭和三十三年　アメリカ曲
西堀栄三郎作詞

雪よ岩よわれらが　宿り
おれたちゃ町には　住めないからに
おれたちゃ町には　住めないからに
朝日にかがやく　新雪踏んで
今日も行こうよ　あの山越えて
今日も行こうよ　あの山越えて

✦雪山賛歌

原曲は「いとしのクレメンタイン」Oh! My Darling。京都大学山岳部の西堀栄三郎(後の第一次南極観測隊の副隊長)が群馬県鹿沢温泉に来ていた時に雪で足留めされ、退屈を紛らわせるために仲間たちと「山岳部の歌を作ろう」と話し合い、この歌が出来ました。仲間内で気に入っていた、オーマイダーリン・・・のメロディに言葉を当てはめて好きなままに詩を書いたそうです。今の時代で言えば替え歌ということですね。ダークダックスでおなじみのこの歌は九番まであります。

冬の夜

作者不詳　明治四十五年

1

燈火(ともしび)ちかく　衣縫(きぬぬ)う母は
春の遊びの　楽しさ語る
居並ぶ子どもは　指を折りつつ
日数(ひかず)かぞえて　喜び勇む
囲炉裏火(いろりび)は　とろとろ　外は吹雪

2

囲炉裏の端(はた)に　縄(なわ)なう父は
過ぎしいくさの　手柄を語る
居並ぶ子どもは　ねむさ忘れて
耳をかたむけ　こぶしを握る
囲炉裏火は　とろとろ　外は吹雪

✦冬の夜

文部省唱歌。二番の手柄を語るは、日清戦争、日露戦争でしょう。今の時代には考えられないことですが、昔話をするように父が子どもたちに普通に語っていたのだと思います。戦後、その部分の歌詞が「過ぎし昔の思い出語る」と改変されましたが、そうなるとなぜ子どもたちはこぶしを握るような聴き方をするのか?と、つじつまが合わなくなって、元の詩に戻ったという経緯があるようです。父親の話の内容はさておき、お父さんお母さんは冬の家庭仕事をしながら子どもたちと囲炉裏を囲む、そんな温かい団らん風景が伝わってくる、それが今でも歌い継がれている所以でしょう。

冬の星座

昭和二十二年　アメリカ曲
堀内敬三作詞

1

木枯らしとだえて　さゆる空より
地上に降りしく　奇(くす)しき光よ
ものみないこえる　しじまの中に
きらめき揺(ゆ)れつつ　星座はめぐる

2

ほのぼの明かりて　流(なが)るる銀河(ぎんが)
オリオン舞い立ち　スバルはさざめく
無窮(むきゅう)をゆびさす　北斗(ほくと)の針(はり)と
きらめき揺れつつ　星座はめぐる

✦冬の星座

文部省唱歌。原曲はヘイス作曲のラブソング。詩は訳詞ではなく堀内敬三の作詞で他に「遠く山に日は落ちて」「アニーローリー」などが有名です。ゆったりとした格調高いメロディ、第2節の終わりから盛り上がり第3節の高音部は聴かせどころ、そして冒頭の節を繰り返し、静かに印象深く納まります。言葉のいくつかを補足しますと、さゆるは冴ゆる、つまり空が冴えわたってくっきりと見えていること。くすしきは奇しき、不思議なという意味。しじま、漢字では静寂、静まり返っている様子。無窮は果てしないこと、無限、永遠の意味です。

ペチカ

大正十四年

北原白秋作詞　山田耕筰作曲

1　雪のふる夜は　たのしいペチカ
　ペチカ燃えろよ　お話しましょ
　むかしむかしよ　燃えろよペチカ

2　雪の降る夜は　楽しいペチカ
　ペチカ燃えろよ　おもては寒い
　くりやくりやと　呼びますペチカ

3　雪のふる夜は　たのしいペチカ
　ペチカ燃えろよ　じき春来ます
　いまに楊(やなぎ)も　萌(も)えましょペチカ

✦ペチカ

ペチカは、ロシアの暖炉兼オーブンのこと。満州への移民が増えていった大正時代に、土地に合った歌をと依頼を受けた白秋と耕筰は現地に赴いて曲作りをしたそうです。作曲の耕筰の譜面にはロシア語の発音に近づけた「ペィチカ」と歌うようにと注釈が書かれていました。満州名物、焼き栗売りの声も登場しています。

雪の降るまちを

昭和二十六年

内村直也作詞　中田喜直作曲

1　雪の降る町を　雪の降る町を
　想い出だけが　通りすぎてゆく
　雪の降る町を
　遠い国から　おちてくる
　この想い出を　この想い出を
　いつの日か包まん
　あたたかき幸せの　ほほえみ

2　雪の降る町を　雪の降る町を
　足おとだけが　追いかけてゆく
　雪の降る町を
　一人心に　満ちてくる
　この哀しみを　この哀しみを
　いつの日か解(ほぐ)さん
　緑なす春の日の　そよかぜ

✦雪の降るまちを

ＮＨＫラジオドラマ「えり子とともに」の挿入歌。その後ラジオ歌謡としてフランス帰りのシャンソン歌手高英男が歌い大ヒットしました。

スキー

昭和十六年

時雨音羽作詞　平井康三郎作曲

1

山は　しろがね　朝日を浴びて
すべるスキーの　風切る速さ
飛ぶは粉雪(こゆき)か　舞い立つ霧か
おおこの身も　駆けるよ　駆ける

2

真一文字(まいちもんじ)に　身をおどらせて
さっと飛び越す　飛鳥(ひちょう)のつばさ
ぐんとせまるは　ふもとか谷か
おお楽しや　手練(しゅれん)の飛躍(ひやく)

3

風をつんざき　左へ右へ
飛べばおどれば　流れる斜面
空はみどりよ　大地は白よ
おおあの丘　われらを招く

✦スキー

スキーの爽快さや楽しさを歌っています。こんな風に滑れたら検定一級、いやいやオリンピックも夢じゃない、そんな感じですね。元気を通り越して勇ましささえ感じる曲調は昭和十六年、その時代の反映、まさにそのものだと思います。

栄冠は君に輝く

昭和二十三年

加賀大介作詞　古関裕而作曲

夏の全国高等学校野球選手権の歌

雲は湧き　光あふれて
天高く　純白の球　今日ぞ飛ぶ
若人(わこうど)よ　いざ
まなじりは　歓呼に答え
いさぎよし　微笑む希望
ああ　栄冠は　君に輝く

風を打ち　大地を蹴りて
悔(く)ゆるなき　白熱の力ぞ技(わざ)ぞ
若人よ　いざ
一球に　一打を賭(か)けて
青春の　讃歌を綴れ
ああ　栄冠は　君に輝く

空を切る　球の命に
通うもの　美しく匂える健康
若人よ　いざ
緑濃き　棕櫚(しゅろ)の葉かざす
感激を　目蓋(まぶた)に描け
ああ　栄冠は　君に輝く

◆栄冠は君に輝く

作曲家古関裕而をモデルにした昨年のＮＨＫの朝ドラ「エール」をご覧になった方も多いことと思います。戦後の学制改革に伴い中等学校野球大会が、高等学校野球大会と変更になったのを機に、大会歌を作ることになりました。夏の甲子園と言えばこの曲が私たちの心に響いてきます。副題は「夏の全国高等学校野球選手権の歌」。

詩の加賀は自身も高校球児でしたが骨髄炎のために右足切断を余儀なくされ、野球を断念。この詩には野球に対する熱い思いが込められています。古関は実際に甲子園球場を訪れ「無人のグランドのマウンドに立って周囲を見回しながら、ここに繰り広げられる熱戦を想像しているうちに、私の脳裏に、大会の歌のメロディが湧き、自然に形づけられてきた。やはり球場に立ってよかった」と、後に述べています。「夏の甲子園」で流れるこのマーチは、高校野球のファンのみならずとも、気持ちが熱くなる、メロディそのものに力強さがみなぎっている、そんな気がします。今回は歌詩を全部紹介します。ゆっくり口ずさんでみるのも、味わいがあると思います。

朝ドラ「エール」の終盤では甲子園球場で歌うシーンが、そして大晦日のＮＨＫ紅白歌合戦でも取り上げられましたので、ご覧になった方も多いことでしょう。本来なら真夏に登場する一曲ですが、春・夏・秋、それぞれに古関裕而作品を紹介させていただいたこの歌集で、季節を越えて、今回取り上げました。

今年の夏は若人たちが甲子園球場に集い、力強く行進、そして熱戦を繰り広げてほしいものです。

「栄冠は君に輝く」の曲とともに・・・。

◆後記にかえて

冬の歌の中には、今は寒さや雪に閉ざされているけれど、春を待つ気持ち、春になったら気持ちよい風が吹く、外で遊べる・・そのようなことを表している部分があります。

「春の遊びの楽しさ語る」（冬の夜）

「ペチカ燃えろよ　じき春来ます」（ペチカ）

「緑なす春の日の　そよかぜ」（雪の降るまちを）

参考資料

日本童謡唱歌全集　足羽彰編

童謡・唱歌の世界　金田一春彦著

うた物語　二木紘三編

古関裕而　刑部芳則著　他

編集　城直美

監修　高島平ココからステーション

（20210103）